

猫神主人のばけねこカフェ

桔梗 楓 Kaede Kikyo



アルファポリス文庫

ドアを開けば、チリリンと鈴の音がした。

「いらっしやいませ。ねこのふカフェにようこそー！」

店員の軽快な挨拶と共にタタッと走り寄ってきたのは、濡れ鴉ぬれからすのようにしつとりとした毛並みを持つ、黒い猫。

黒猫は透明度のあるアイスブルーの瞳でまっすぐに客を見つめて、にゃーんと可愛らしく鳴いた。

『ねこのふカフェ』

ここはネットや口コミで人気を集める、巷ちまたで話題の猫カフェだ。

個性的な猫が出迎えてくれる。愛嬌あいきょうのある猫がいる。猫好きにはたまらない猫カフェ！

プロローグ 猫神主人のばけねこカフェ



そんな噂を聞いてやってきた客は、誰もが「なるほど」と納得するだろう。席に座ると、早速ふかふか毛の三毛猫が膝に乗ってくる。

すべらかな手触りの頭を撫でれば、三毛猫は目を細めてゴロゴロと喉を鳴らす。愛想のいい猫に客が相好を崩した時、店員が注文を聞きにきた。

長い黒髪をふたつに分けておさげにした、笑顔が似合う元気そうな女性の店員で、ベージュ色のカフェエプロンの裾には、白い肉球の柄がプリントされている。

メニューを渡された客は「さて、なにを頼もう」と、悩み顔になった。

ねこのふスベシャルランチ。季節のケーキセット。ラテアート。

客がメニューに指をさまよわせていると、ストツとテーブルに猫が乗ってきた。それは、トロンとした垂れ目がチャーミングなアメリカンショートヘアだ。

ふわふわした小さい前足で、チョンチョンとメニューを叩く猫が指しているのは

『ねこおやつ』だった。

一袋百円。これを買えば猫におやつをあげることができるのだ。

「欲しいのかい？」

客が撫でようとした途端、アメリカンショートヘアはプイとそっぽを向いて、尻尾

でぺしっと手を叩く。

——おやつをくれなきゃ触らせてあげない。

まるでそう言っているみたいに見える仕草に、客は思わず笑いをこぼし、『ねこおやつ』と、『ねこのふスベシャルランチ』を注文した。

カウンターには渋い口ひげを生やしたマスターが控えており、店員の注文を受けると調理を始めた。

客は自分の注文品が来るまでの間、猫におやつをやる。

チューブの包装をちぎった瞬間、アメリカンショートヘアの瞳がきらりと光った。

「にゃん、にゃん！」

前足でぐいぐいと手招きする猫はひげをピンと立たせて、期待に満ちた顔で見上げてくる。

中からペースト状の餌を出すと、猫は嬉しそうにペロペロとチューブの口を舐めた。

「にゃー！」

膝に乗っていた三毛猫も、欲しがってグルグルと喉を鳴らす。

「順番だよ」

客が猫に話しかけていたら、足元へ別の猫が擦り寄ってきた。

「なあ〜ん」

最初に出迎えてくれた黒猫だ。おやつが欲しいのか、甘えた声を出す。

三匹の猫たちに囲まれて客がデレデレし始めた時、ふいに野太い猫の鳴き声が響いた。

「うにゃ〜ご。なあ〜〜ご」

まるで中年男性が猫の真似をしたような、お世辞にも可愛いとは言いがたい声である。

客が怖いもの見たさで恐る恐る後ろを振り向くと、そこにはつい二度見するほど大きな猫がいた。

白い台座に、ふかふかの座布団。そこにどつしりと座るのは、通常の猫の三倍は巨大な猫。……言い換えると『でぶ猫』である。

ベルシャ猫のようだが、非常に貫禄があり、相撲でも取ったら強そうだ。

眼光鋭い金の瞳を持つその猫は、佇まいに風格があり、面持ちにも威厳がある。だが、とてもじゃないが可愛いとは言いがたい。

それなのに、客は目をそらせなかった。なんというか奇妙なカリスマがあるのだ。

「ぬなあ〜ご」

中年男性の声色で、猫が猫撫で声を出した。本人（猫）としては、甘えているつもりらしい。

反応に困った客が固まっていると、ベルシャ猫はおもむろに前足を上げた。

そして——おいで、おいでと、猫招きをする。

リアル猫招きである。

だが、猫の迫力がありすぎて、福どころか余計なものまで招きそうだ。

客は立ち上がると、ベルシャ猫に近づいた。台座には木製のプレートが貼っており、『ねこのふカフェの守り神・ウバちゃんです』と記してある。

「守り神?」

客は首を傾げた。

確かにでぶ猫は『神様』と言われても納得できそうな貫禄がある。悪く言えばとことん偉そうにふんぞり返っている。

猫の前にはミニチュアの賽銭箱さいせんばこが置かれていて、客は誘われるように十円玉をチャ

リンと入れた。

すると、でぶ猫は前足を上げて差し出す。そして、つられて出した客の手のひらにポフツと前足を載せた。

「ニャアアン。ニャー。ウニア〜」

ダミ声でなにか話している。猫なのだから喋るわけがないが「よきにはからえ」と言わんばかりの尊大かつおらかな雰囲気だ。

でぶ猫は、チョイチョイと賽銭箱さいせんばうを前足で叩いた。どうやらさらなる賽銭を催促しているらしい。なかなかアコギな猫である。

「ニャン、ニャーン」

客の足元でおやつ continué をねだる甘え上手な猫たち。客は気を取り直して、三匹の猫に順番におやつをあげた。

黒猫はチューブタイプのおやつをべろと舐めると、ついでに客の手も舐めて、スリスリと擦り寄る。

三毛猫はおやつに満足したのか、ぐいんと背伸びをしてから、お行儀よくお座りをしてペコリと頭を下げた。

「ニャン！」

そして元氣よく鳴くと、その場でクルンと一回転する。

「えっ」

客は驚きの声を出した。

猫が、芸をしたのだ。犬が芸するのは普通だが、猫が芸するのは珍しい。

しかも三毛猫に続いて、アメリカンショートヘアと黒猫も次々に一回転する。

ニャー、ニャー、ニャー。うにゃ〜ご！

最後に鳴いたのはあのでぶ猫、ウバだ。ウバはのっそりと二本足で立ち上がると、前足でテシテシと二拍し、ペコリと頭を下げて座り直す。

客は、あぜん 唸然とした表情を浮かべた。

猫が二本足で立つ……まあ、立つこともあるだろう。でも、前足で拍手などできるだろうか？ いや、できなくもない……か？ 頭を下げて礼をする。……人間なら簡単な仕草だが、猫では見たことがない。

客はおっかなびっくり店員を振り返った。

黒髪をふたつに分けておさげにした女性の店員は、愛想よく笑みを浮かべる。

「うちの猫ちゃん、とっても芸達者なんですよ！」

そう言った彼女がテーブルに置いたのは、サラダとオムライス、スूपのついたランチだ。

「そ、そうなんだ。すごい芸達者ですね」

芸と言われたら、芸なのだろう。犬顔負けの芸だが、この広い世の中、芸のうまい猫がいてもおかしくないだろう。多分。

客はそう無理矢理自分を納得させ、ランチを食べ始めた。

「なあ〜ん」

客が食事をしている最中も、猫たちは全力で愛想を振る。

食事の邪魔をしない程度にスリスリしたり、傍でお座りをしたり。

人懐こい猫に囲まれて、客はオムライスを頬張りながら幸せそうな顔をした。

「また来ますね」

会計時にそう言い残し、満足げに帰っていく客を、店員は笑顔で見送った。

客の捌けた店内。

一息ついたおさげの店員は、猫たちをジロリと横目で睨んだ。

「もう、みんな。芸ってごまかすのも一苦労なんだから。やりすぎたらだめだよ！」

店員の叱責に、でぶ猫のウバはのんきにあくびをした。そして、人間の言葉で答える。

「これくらい問題にもならぬわ。客の満足そうな顔を見たか？　すべてわらわの愛くるしい仕草のおかげじゃな！」

ウバが偉そうにふんぞり返る。だが、すかさずアメリカンショートヘアが「なあ〜に言ってるのよっ」と突っ込みを入れた。

「あたしの懐きテクが効を奏したに決まっているじゃない。猫だって色気を出してナンボよ！　甘く、艶やかに、客にソフトタッチするのが重要なのよっ」

「君が言うとは非常にいかかわしく聞こえるのはなぜかな。猫スタッフに重要な要素を挙げるならば、僕の持つ『知的さ』だろう」

アメリカンショートヘアの隣で、フツと鼻で笑うのは雄の三毛猫だ。その尻尾の先は二本に枝分かちしている。

「わらわの愛らしさがわからぬとは、化け猫のまなこは節穴なのかのう」

「図体と態度だけデカイ猫神様に言われたくない。女なら、色気で勝負すべし！」
 「僕は男だけど、猫の魅力を語るならば、知性は欠かせないファクターだ」
 わーわーニャーニャーと三匹の猫たちが好き勝手に言い争う中、店員の足元に黒猫が擦り寄ってきた。そして、心配そうにソワソワと歩き回る。

「美来、ごめんな。猫らしくするのがむずかしくてさ。宙返りくらいなら大丈夫かなって思ったんだけど、だめだったか？　俺、猫っぽくなかったか？」

真摯な瞳で見つめてくる黒猫に、店員はクスツと笑い、ヒョイと黒猫を抱き上げた。

「大丈夫。キリマは猫っぽいよ。ちよつと仕草が規格外だけどね」

軽く頭を撫でれば、ようやく黒猫はホツとしたようにゴロゴロと喉を鳴らした。

ここは、猫に見えて猫ではない『あやかし』がキャストを務める猫カフェ。

正真正銘の神様が主を務め、三匹の化け猫が客に愛嬌を振りまく。

彼らはなにも、好き好んで猫カフェを切り盛りしているわけではない。

ただ、失われた力を取り戻すために奮闘しているのだ。

あやかし猫の事情を知る唯一の人間——鹿嶋美来は、ふと過去を思い出す。

『ねこのふカフェ』が開かれる前。すべては、あの出会い——神社で猫を拾ったあの日から始まった。

第一章 捨て猫は猫神で、飼い猫は猫鬼で。



それを運命だと言うのなら、おそらくは、そうなのだろう。

今年で十九歳になる鹿嶋美来が毎朝欠かさずウォーキングをして、最寄りの神社に参拝するのを日課にしていることも、この出会いも、必然だったのだ。

桜が美しく咲きほころぶ四月。暖かい風に揺れ、花びらがひらひらと舞い落ちる。春爛漫といった境内の様子に心を和ませていた美来は、神社の隅に段ボールが置かれてるのに気づいた。

にゃあ。

そこから聞こえた鳴き声は、ダミ声だった。低く濁っており、可愛げが全くない。

美来が段ボールに近づいて中をのぞき込むと、灰色の猫が彼女を見つめていた。

くすんだ毛色をしているのに、目だけは爛々と金色に輝いている。

(大きなあ)

それが美来の一印象である。

成猫であることに間違いはなさそうだが、普通の猫の三倍はあるだろう。縦にも横にも大きくて、段ボールがぎゅうぎゅうになっている。一匹しかないのにすし詰め状態、いや、箱寿司のようだ。

「圧倒的な存在感だね」

美来は膝をついて座り、猫の頭を撫でる。その毛並みは荒れていて、撫で心地もゴワツとしていた。

顔つきや毛の状態から見ても、どうも年老いた猫らしい。目にヤニが溜まっており、健康状態が心配だった。すぐにでも獣医に診てもらう必要があるそうだ。

老猫だから捨てられたのだろうか。愛らしさとはほど遠い顔をしているせいで、飼い主にそっぽを向かれたのかもしれない。

なににしても可哀想な猫だ。

美来はこの子連れでいこうと決意して段ボールを持ち上げた。

「おもっ!!」

思っていたよりもずっと重量がある。米を運んでいる気分になりながら、美来は神

社を後にした。近くに、早朝から開くなじみの動物病院があるのだ。そこで一通りの診察を受けてもらおう。

拾うか拾わないか。そんなこと、ちっとも悩まなかった。

出会ったからには飼うのだ。美来の心に、そのまま捨て置くという選択肢はなかった。

朝の診察時間を待つて、顔なじみの獣医に猫を診てもらったところ、猫の状態は美来が想像していたよりも悪かった。すぐさま適切な処置が施される。

診察が終わると、動物病院から家に向かった。帰りの道すがら、美来は段ボールを「よいしょ」と抱え直す。

病院でペットキャリーを借りたかったのだが、巨大猫に合うサイズがなかったのだ。一体なにを食べたらこんなに大きくなるのだろう。

「君はえなかったね。注射を打たれても平気な顔をしていたし。我慢強いんだねー」

美来は声をかけた。猫はツンとそっぽを向いて「ニャア」と鳴くだけだ。相変わらずダミ声で、可愛げがない。

しかし、猫は不思議と逃げ出そうとはしなかった。病院でも大人しくしていたし、

美来に爪を立てることもしない。

つまり、美来に飼われる気になっているのだろうか、それなら嬉しいが……そこまで考えた美来はハタと大事なことを思い出し、灰色の猫に話しかけた。

「あのね、今から行く家——私の家には、すでに猫が一匹住んでいるんだよ。だから仲良くしてほしいな。……って言っても、猫が人間の言葉を理解するわけないか」
大丈夫かなあと、美来はため息をつく。

猫にも相性はある。あまりに気が合わないなら、テリトリーを分ける必要があるだろう。だが、美来の住む家には両親も住んでいるから、猫のためにそこまでのスペースを作ることはできない。

「できれば喧嘩しないでほしいな。ただでさえ君を連れ帰ることでお父さんは怒るだろうし」

父は職業上、ペットを好まないところがある。

美来の家は、喫茶店を経営しているのだ。といっても、街はずれで繁盛もしていない、寂れた古い店なのだが。

「そーっと帰ろうね。そーっと」

美来は猫に囁き、コソコソと裏口から家に入った。

「ただいま……」

美来の住む家は今年で築五十年になる。見た目的にもなかなか年季の入った住宅で、祖父が亡くなり美来の父に相続されて以来、修繕を重ねていた。

裏口の先は台所だ。フローリングではなく古めかしい正方形のパネル床材が広がっていて、美来が歩くとギシギシ音が鳴る。美来はこっそりと、台所の端に猫の入った段ボールを置いた。猫を見せるのは後にして、先に両親の機嫌を窺おうと思ったのだ。大丈夫。母は猫が好きだし、父も、説得すればなんとかいけるだろう。すでに猫を一匹飼っているのだ。もう一匹増えたところで問題はないはず。

「ん？」

キッチン奥、廊下側から「ニャア」と声がした。

足音を立てずに黒い猫が近づいてくる。美来は膝をついて座ると、黒猫の頭を優しく撫でた。

「キリマ、ただいま」

黒猫——キリマの顎を人差し指で擦る。すると、キリマは目を瞑って気持ちよさ

そうに喉を鳴らした。

ぴくぴくとひげが揺れて、しなやかな尻尾がゆるりと上がる。

濡れ鴉のような艶のある毛並みを持つ、キリマ。

美来がそう名付けたこの猫もまた、あの神社で拾ったのだ。不思議な偶然である。二年前の冬の朝、キリマは段ボールの中で震えていた。

拾った時の毛並みはゴワゴワに荒れており、見るからに衰弱していた。しかし現在はほどよくスツキリとした体形で毛艶もよく、飼い主の欲目もあるかもしれないが、『美猫』と言ってもいいだろう。美来が世話をしたキリマはすっかり彼女に懐いていて、今も甘えた鳴き声で美来の手に擦り寄った。

「キリマ。実は猫を拾ったの。先輩猫として、仲良くしてくれると嬉しいなあ」

その時、段ボールの中にいた灰色の猫がのっそりと起き上がる。キリマの三倍はある巨大猫がジロリと睨んだ途端、キリマが毛を大きく逆立てた。膨らませた尻尾をピンと立て、前かがみになりながら「フーッ」と威嚇し始める。

慌てたのは美来だ。いきなり臨戦態勢だなんて困る。まだ親に説明していないし、説得する前に喧嘩をされては、間違いなく父がいい顔をしない。

「キリマ待つて！ お願い、落ち着い……」

「——まさかこんなところでそなたに出会うとはな。世間とは狭いものよの」
ふいに、トーンの低い女の声が聞こえた。美来は「へっ？」と間の抜けた声を出す。
慌てて辺りを見回すが、美来と猫二匹以外、台所には誰もいない。

「なんでお前がいるんだ。ここは俺のテリトリード。出ていけ！」

「ひゃ!？」

今度は、涼やかで高い男性の声。それも明らかに、すぐ傍から聞こえている。

美来は目の前の猫たちを見た。まさかこの二匹が喋っているのだろうか。

「キ、キリマ、あなた、なんつ、いつの間に、人間の言葉なんか覚えたの!？」

世の中には、人間の言葉のような鳴き声を出す面白い猫がいる。「ごはーん」とか
「なんで」とか、鳴き声がそんな風に聞こえる個性的な猫だ。

しかし今の声は、明らかに日本語だった。猫は訓練するとあんなにペラペラと話せるものなのだろうか。いや、そんなはずはない。

「ええ!? ちよつ、落ち着け私。いやいやキリマ、どうしちゃったの!？」

混乱しつつ声を上げる美来に、キリマは「はあ」とため息をつく。

「こうなることが予想できていたから、俺はずっと隠していたんだ。……美来、落ち着け。俺は猫であって猫ではない。だから、言葉を話すのはおかしいことじゃない」
「ね、ねこであってねこではない……ど、どういう意味?」

目を丸くしていると、キリマは前足と後ろ足を揃えて座り、尻尾をゆるりと曲げて美来を見る。

神秘的な瞳はアイスブルー。□元のひげ袋はびくびくと震えている。

「俺は猫鬼。かつては人間に忌み嫌われていた、病の力を振るう鬼なんだ」

「猫鬼? つまり、本当は猫じゃなくて鬼ってこと?」

「ああ。美来を怖がらせなくなかったから、ずっと猫のフリをしていたけどな」

美来は「ひえー」と呟いた。正直下ン引きである。自分の唇の端が引きつっているのがわかった。二年前に拾った猫が実は鬼だったなんて、一体誰が信じるだろう?

しかし目の前に座るキリマは、明らかに人の言葉を喋っている。普通の猫ではありえないことだった。

つまり、キリマが鬼であるのは真実なのだ。

「おぬしは病を溜め込む力すら失ったと見える。ほぼ、ただの猫に成り下がったのだ

な。言葉を喋るくらいが関の山か。情けないことよのう。『きりま』などという名までつけられおつて、江戸を震撼させた鬼も、今や人間の飼ひ猫か」

段ボールの中にのっしりと座る大猫が、にんまりと金色の目を細めて言った。キリマはムツとしたように、目の前の猫を睨む。

「俺がどこでなにをしようが俺の勝手だろ。おまえこそ、ずっと山に閉じこもってたくせに、一体なんの用で下りてきたんだ！」

牙を剥き出しにし、黒い尻尾をピンと立てる。前かがみの姿勢になって威嚇するキリマに、大猫は「フン」とピンク色の鼻を鳴らした。

「さして理由は無い。しいて言うなら、暇を持て余したのだ」

「暇だと？」

「ああ。やることもないのでな。戯れに人里を見にきたのだ。適当な箱を見つけて寝床にしていたら、その人間が問答無用でわらわを運んでしまった。途中、やたら臭い場所、不敬にも体をあちこち触られてな。まこと不快であった」

「え、ごめんなさい。捨て猫だと思つたし、体も汚かったから、ちゃんと病院で検査したかったんです」

美来はつい敬語で謝る。この汚い猫はやたらと態度が尊大で、奇妙な威厳を感じるのだ。

キリマは「山に閉じこもっていた」と言っていたが、一体この大猫は何者なのだろうか？

美来が疑問を覚えていると、彼女の言葉に腹を立てたのか、大猫は段ボールの中で「シャーッ」と牙を剥いて美来を睨む。

「汚いとはなんだ不敬な娘め！ わらわは綺麗好きであるぞ。毎日毛繕いも欠かさず行っているのだ！」

「あのなあ。人の世界にはシャンプーというものがあるんだ。これで洗ってもらうとピカピカになるんだぞ。はつきり言ってお前は汚ねえよ。なんせ四百年も山に閉じこもっていたんだからな」

「よんひやくねん!?」

美来が素っ頓狂な声を出す。すぐさま大猫が「いちいち騒ぐでない！」と叱咤した。「そうよ。わらわは江戸の時代に生まれし猫の神。そのふぬけ鬼と一緒にするでないわ。わらわは神の御業を持つ尊き存在なのだからな。敬うがよい、人間よ」

巨大な猫は四本足で立ち、のっそりと段ボールから出てくる。丸く太い尻尾に、もさもさの毛並み。改めて見ても、全く可愛げのない容姿をしている。

これが神なのか。美来はまじまじと大猫を見つめてしまう。確かに偉そうな口調だが、ちっとも神様には見えない。あと、臭い。はつきり言って単なる態度の大きい猫だ。

「猫神ねえ」

「わかるぞ娘。そなた、わらわの力を疑っておるな？」

ぎろりと睨まれ、美来はびくりと肩を震わせる。すると彼女を守るようにキリマが低く唸った。

「美来に手を出したら、俺が許さない」

「ほお？ 力を失った鬼が、わらわになにをするのかの」

「落ちぶれたとはいえ、俺は猫鬼だ。刺し違えてでもお前を呪ってやるよ」

牙を剥き、殺意すら露わにしているキリマだが、その言葉に反応したのは美来だった。

「だめだよ！」

彼女が後ろからキリマを抱き上げる。

「なんだかよくわかんないけど、刺し違えるのはだめ！」

「美来。でも、俺は」

「言葉を話そうと猫鬼だろうと、キリマは私の大切な猫だよ。だから、そんなこと言わないで！」

つやつやの毛並みと優しいシャンプーの香り。抱きしめると温かくて、ふかふかししている。二年の間で、キリマはすっかり家族の一員になっていた。ぐるぐると喉を鳴らしたキリマは、借りてきた猫の如く、大人しくなる。

ふう、と巨大猫が呆れたようなため息をついた。

「まことふぬけおったな。もしや、人里に下りた猫どもは皆そうなののか」

ブツブツと猫が呟いた時、廊下側の扉がカチャリと開いた。

「美来！ 誰か来てるの？」

現れたのは美来の母、花代子だった。ボブカットの黒髪に、目が細く、おっとりした雰囲気をしている。顔の造りがあまり美来と似ていないのは、美来が父親似だからだ。

美来は慌てて猫たちの口を手でふさいだ。言葉を話すなというジェスチャーだ。

「お、お母さん、おはよう」

「おはよう〜美来」

花代子は挨拶を交わしたあと、下を見た。そこには美来とキリマ、そしてふんぞり返っている大猫がいる。

「あら〜また猫ちゃん拾ってきたの？ お父さん、怒るわよ？」

「うう、そこはちゃんと説得するつもり。ちゃんと病院で検査もしてきたよ」

「私は猫が大好きだから構わないけどね」。まあ、それにしても大きい猫ちゃんだわ〜」

花代子はその場で膝をつき、大猫の頭を撫でた。すると、大猫はなぜか驚いたように目を見開き、ふるふると震え出す。半開きになった口元から鋭い牙がチラリとのぞいた。

「ボリユームたつぷりのぶた猫ちゃんね。うふふ、お顔もぶちゃいくで可愛い。うん、お母さんは気に入っちゃったな〜」

軽々と大猫を持ち上げて抱きしめた花代子が、くんくんと匂いを嗅いだ。

「やつぱりちよつと臭うわね〜。じゃあ、お母さんがシャンプーしてあげます。美来は頑張ってお父さんを説得してね〜」

花代子は大猫を抱き上げたまま、すたすたと台所を出ていってしまった。終始母のペースで、美来は岬然とした表情でパタンと閉まるドアを見つめる。

「お母さん、猫神を問答無用で連れていつちやった」

「『お母さん』はおっとりしてる割に、有無を言わせないところがあるからな。俺も、お母さんには全く逆らえない」

美来の腕の中で、キリマも呟く。

「……キリマもそうだったんだね」

そういえば二年前も、花代子はある調子でキリマの首根っこを掴み上げシャンプーに連れていったのだ。

「それにしても、キリマが猫鬼だなんてね。全然わからなかったよ」

改めて美来がしみじみ言うのと、キリマは耳をぺたんと伏せて俯いた。

「怖がるんじゃないかと不安だったんだ。それなら、猫のフリをしようと思った。俺はただ、君の傍にいたかったから」

「キリマ……」

美来はキリマをぎゅつと抱きしめる。頬ずりをすると、なめらかな毛並みが心地よい。

「キリマが猫でも鬼でも関係ないよ。君は私の大切な家族なんだからね」

「美来……。むう、家族、か」

キリマがゴロゴロと喉を鳴らしながら、やや不満そうに呟く。美来が不思議に思っ
て首を傾げると「なんでもない」と首を横に振った。

「美来がそう言ってくれるならよかった。俺はずっと、美来の傍そばにいいんだな」

「もちろんだよ。それにキリマとお話できるなんて嬉しい！　なんだかおかしい気分だけだね」

美来はくすぐすと笑って、キリマを床に下ろした。

「さてと。お店が忙しくなる前に、お父さんを説得しないとね」

台所にある壁時計を見れば、今は八時四十五分を指している。開店は九時なので、あまりゆつくりしてはいられない。

美来はキャットフードと水を二匹用意してから、水道で綺麗に手を洗い、アル

コール消毒をした。そして裏口を出て隣に建つ店に入る。父が経営している喫茶店は実家と隣接しているのだ。

その喫茶店は、美来の実家と同じくらい古い外観だった。なにせ築年数は実家と同じで、まだ一度も改装されたことがないのだ。亡くなった祖父から父に経営者が変わっても、喫茶店は昭和の匂いを色濃く残したまま佇たなずんでいた。レトロと言えば聞こえがいいが、悪く言えば近寄りがたい古めかしさがある。

美来が店の裏口から入ると、父、源郎げんろうはモーニングメニューの準備をしていた。今やこの店に来る客は常連ばかりで、新規客は全く見込めない状態にある。はつきり言って経営状況は芳かんばしくない。

駅から歩いて十五分という恵まれない立地にも問題があった。駅前にはもつとオシャレなカフェが並んでいるし、わざわざ十五分も歩いてこの店に来る客はいない。

「お父さん、おはよ」

「美来か、おはよう。今日はバイトじゃないのか」

ステンレス製の大きなバットに湯を溜めて、カップを温めていた源郎がこちらを見た。口ひげを綺麗にたくわえ、短い黒髪を横に分けた中年男性で、背丈がひょろりと

長い。喫茶店のマスターというより、文壇にちなんだ職業についていそうだとよく常連客に言われているが、悲しいことに文才は全くない。

「今日はバイトは休みだよ。実はそのう……散歩中に猫を拾っちゃったんだけど……」指をにごによと絡ませながら呟くと、源郎は「はあ!？」と声を上げた。

「またか! うちは喫茶店だぞ。衛生面でよくないとわかってるだろう?」

「わ、わかってるよ! だから猫は絶対お店に入れないし、私もここに入る時は手洗いと消毒を欠かさずしてるじゃない」

言い返しつつ、美来は決まりが悪そうに源郎を見た。彼は真面目で堅物なのだ。食品を扱う場所の近くに動物を飼っているのが、どうしても落ち着かないらしい。

「それで、もう一匹飼っていいかな。というか、今お母さんがシャンプーしているけど」

「またそのパターンか! どうせ動物病院も行ったんだろう? 外堀から埋めて、なあなあで飼おうって魂胆なのは見え見えなんだぞ」

これみよがしにため息をつく源郎。そう、キリマを飼う時もひと悶着あったのだ。源郎は反対していたのだが、美来と花代子が強引にキリマを世話して既成事実を作っ

た。源郎はそのことを根に持っているのだ。

「まさか、この調子で三匹、四匹と増やすつもりじゃないだろうな」

「それはさすがにないと……思っけど」

「全く信用できない! どうせ、また捨て猫を見つけたら拾うんだろ? あのな、可哀想なのはわかるが、すべての捨て猫を飼うわけにはいかないんだぞ。美来のやっていることは結局、自己満足に過ぎないんだ」

「わ、わかってるよ!」

居心地悪く、美来は俯いた。高校を卒業して以来、美来はアルバイトをしながら実家で暮らしている。アルバイトの給料から自分の生活費を支払ってはいるものの、完全に独立しているとは言えない。そんな立場でペットという食い扶持を増やしていることに、親として源郎が怒るのも無理はなかった。

だが、どうしても見捨てられなかったのだ。なんとか今回だけでも大目に見てもらえないだろうか。

美来は懸命に説得方法を考える。

「アルバイトで金を稼いでも、その殆どがキリマの世話代と美来の生活費じゃないか。

そんな状況でもう一匹飼うなんて……」

ブツブツ文句を言う源郎に、美来は縮こまる。だが、ふいに源郎が「そうだ！」と声を上げた。

「食い扶持おもちが増えるなら、働かせればいいじゃないか！」

「……へ？」

「猫に生活費を稼がせるんだよ。それなら、もう一匹飼ってもいい」

「どっ、どういうこと!？」

まさか店内でネズミでも獲とらせるのだろうか。しかし、この辺りでネズミなど見たことがない。それならまさか、あの黒い羽のある恐ろしい害虫、ゴキ……。いや、ヤツは名前すら思い出したくない！ 想像を膨らませた美来は、慌てて源郎に詰め寄った。

「ちよっと待つて。そもそもアレが出る喫茶店なんてイヤだよ！ それに、アレをキリマに獲らせるなんて絶対反対！」

「なにを言っているんだ。猫に接客させるんだよ。つまり、猫カフェだ」

「……ね、猫カフェ？」

美来が目丸くする。源郎は名案を思い付いたとばかりに満足そうな顔をして、指を立てた。

「そう、猫カフェだ。俺は前からこのボロ店をどうにかしたくてな。物は試しと、猫カフェの講習を受けたことがあるんだ。美来も猫カフェでバイトしてるだろ。実務経験のある店員と、講習を受けた店長がいりや、猫カフェは開店できる。店を改装したり、諸々の許可を取ったりしなきゃならんから、時間は少しかかるけどな」

確かに美来のアルバイト先は猫カフェだ。その店は家の最寄り駅から二駅先にある。こちらが猫カフェを経営しても際立きわだったライバルにはならないだろう。

「でも、お父さん。絶対に猫を店に入れるなって言っていたのに、猫カフェはいいの？」

「今の店に猫を入れるというのは当然だろ。でも、猫カフェになるなら話は別だ」

「……お父さん、猫、嫌いじゃなかったの？」

キリマを飼う時に大反対されたから、美来は父が動物嫌いなのだと思っていた。実家で過ごしていても、父はキリマに構わなかったし、もつと言えば、キリマを無視しているように見えていたのだ。

しかし、源朗は首を横に振る。

「猫は嫌いじゃないよ。……まあ、とりわけ好きってわけでもないけどな。俺はもともと猫より犬のほうが好きなんだ」

「お父さん、犬派だったんだ」

「ああ。だからドッグカフェも考えたんだが、猫カフェに比べて敷地が必要でなあ。うちは小さいから無理だ」

なるほど、と美来は頷いた。これといって特徴のない、強いて言えば古いだけが特徴であるこの喫茶店は、年々売上が渋くなっている。

こちらでひとつ画期的な『売り』を作らなければカフェ業界で生きていけないと、源郎は危機感を持っていたのだろう。だから、猫カフェの講習を受けていたのだ。

「俺は、俺の淹れる最高のコーヒーを味わってもらえたら、喫茶店の形はなんだっていいんだ。猫で売上が上がるなら問題はない」

「それで、猫に生活費を稼がせろって言ったんだね」

この店を猫カフェに改装して、キリマやあの大猫を『看板猫』として店に置く。それは面白そうだな、と美来は思った。

しかし、あの猫たちが了承するだろうか。……彼らは単なる猫ではない。かたや猫鬼、かたや猫神なのだ。特に猫神と自称しているほうが『看板猫』になることを嫌がる予感がする。

美来は腕を組んで考えていたが、「わかった」と頷いた。

「とりあえず、猫に相談してみるよ。オッケーがもらえたら、その案でいくね」

そう言って、美来は裏口から喫茶店を出る。

ひとり残された源郎は温まったカップを布巾ふきんで拭いた。そして、思い出したように眉をひそめる。

「……猫に相談ってなんだ？」

訝いふかしげに呟き、はてなと首を傾げた。

美来は隣の実家へ戻ると、リビングに入る。キリマがソファの上で体を伸ばしてくつろいでいる。近くにあるテーブルの椅子には母の花代子が座って、膝に大猫をのしりと乗せていた。

「おかえり〜美来。お父さん、どうだった？」

「とりあえず、条件付きで了承してもらえたよ。でも、その条件が結構大変だね」

美来はパフツとソファに座る。するとキリマがひよこつと顔を上げ、スルリと美来の膝に乗ってきた。

キリマの小さな頭を撫でつつ、花代子にブラッシングされている大猫を見つめる。

「……その猫、白かったんだね」

「そうなのよ。灰色だったのは毛が汚れていたからなのね。よっぽど埃^{ほこり}っぽいところにいたんでしょう。可哀想にね。もう綺麗になりましたからね」

ふんふんと鼻歌を歌いながら、花代子が猫にくしを入れる。自らを^{みずか}『猫神』と言ったその猫は、うっとりと目を閉じてブラッシングに身を任せていた。

よく見れば、その大猫はベルシャ猫のようだった。ふわふわの白い毛は長く、顔の特徴にもそれっぽさがある。普通のサイズよりも体が大きいので可愛げはないものの、ベルシャ猫らしい気高さは窺^{うかが}える。

一方、キリマは典型的な日本猫に見えた。オシキャットにも似ているが、ほんわりした小顔に、人間で言うなら中肉中背といった体形で、ゆるりとうねる長い尻尾。彼の顎^{あご}下を指先で撫でれば、ごろごろと気持ちよさそうに喉を鳴らす。

「それで、条件ってどういうこと?」

花代子が尋ねてきた。美来が猫カフェの話をすると、「へええ」と興味深そうに目をきらきらさせて頷く。

「いいじゃない、お母さんは賛成! うちはとにかく人気がないし、どうしようかと考えていたもの。猫カフェなら駅前のカフェと差別化できるし、素敵だと思っわ」

「確かに、話題性はあるかもしれないね」

「キリマくんはハンサムだし、ウバちゃんなんといってもこのボリュームなもの。さっという看板猫になるわ」

ニコニコと微笑み、優しくブラッシングをする花代子。美来は母の言葉を聞いた後、時間差で「えっ」と声を上げた。

「待って、ウバちゃんってなに」

「この子の名前よ。さっき決めたの」

「ちよっと! なにを勝手に名付けてるの! 私が拾ったのに!」

美来が非難すると、花代子は至ってマイペースに「え?」と唇を尖らせる。

「だってキリマくんは美来が名付けちゃったじゃない。私も名前を考えたかったの」

にー！ だからウバちゃんは私が決めたの。ウバちゃんもそれでいいって言ったのよ。ねー？」

花代子の言葉に、美来はぎょっとした。

「えっ、ま、まさか、その子、お母さんに『それでいい』なんて答えたの!？」

思わず聞くと、花代子はおかしそうに笑い出す。

「なに夢みたいなことを言ってるの。そんな風に返事をしてくれたら嬉しいけど、ウバちゃんは猫なのよ。言葉を話すわけじゃないじゃない。ウバちゃんって呼んでみたら、『ニャン』って答えてくれたから、気に入ったのかなって思ったのよ」

「あ、ああ。そういうことね。……よかった」

心底ほっとして美来は息を吐いた。なにを隠そう、その猫は本当に言葉を話すのだ。母は猫が喋ってもおおらかに許してくれそうだが、父は絶対に気味が悪いと嫌がるだろう。卒倒するかもしれない。

美来はかっくりと肩を落として、膝に乗るキリマの背中を撫でる。

「それにしても、どうしてウバなの？」

「キリマは、美来の好きなキリマンジャロコーヒーから取ったんでしょ？ だから私

はウバ茶から取ったの。お母さん、紅茶党だし」

「そういうことか……」

美来が納得すると、花代子は「よし！」と満足げに頷いて、ブラッシングを終える。そしてウバを床に下ろし立ち上がった。

「じゃあ、お母さんもお店に行くわね。お父さんから猫カフェについて詳しく話を聞きたいし。美来はお掃除当番よろしくね」

そう言って、花代子はスリッパの音を鳴らしてリビングを出ていく。

「……あのおなごは、一体何者なのだ」

ボソッと話し出したのは、花代子にウバと名付けられてしまった大猫、もとい、猫神だった。美来の膝の上で、キリマが前足を突き出してグイーと伸びをする。

「あの人間は、美来の母親だよ」

クアアとあくびをして答えるキリマを、ウバは「それはわかっておる」と睨んだ。

「わらわが問うておるのはそこではない。あの身のこなしはなんなのだと聞いたかったのだ。わらわは最初、あのおなごから逃げようとした。それなのに、気づけば腕の中にいたのだ。全く逃げ出せる隙がなかった。まさか人間とはかように、わらわより

も俊敏な生き物なのか？」

「そんなわけないでしょ。お母さんは合気道の有段者なの。だから動体視力が際立^{きわ}っているんだよね」

美来は呆れ口調で答えた。母の花代子は合気道を極めているのだ。普段はおっとりしているのに、いざとなるとすばやく、優れた動体視力をもって確実に獲物を仕留める。美来が幼少の頃も、いたずらをした時に母から逃れられたためしがない。

キリマがぼそりと呟いた。

「猫神。『お母さん』から逃げられると思うなよ。俺も何度か逃走を図^{はか}ったが、お母さんは気配すら消せるんだ。そして後から俺を捕まえる」

「なんと……。昨^{さっしん}今の人間はふぬけだと思っていたが、そのような達人もいようとはそれに、あのおなご——いや、『お母さん』のしゃんぷーと、ぶらっしんぐも恐ろしかったぞ。なんだあれは。極楽浄土へのいざないか！ わらわは危うく昇天するところであつたぞ！」

体を震わせるウバの毛は、花代子のブラッシングによってツヤツヤになっていた。

さつきまでゴワゴワで灰色に汚れていたというのに、今はシルクを思わせる白銀^{はくぎん}の輝

きを放っている。

「お母さんはシャンプーとブラッシングがうまいんだよ。あれは、うん、気持ちいいな」

しみじみとキリマが頷き、美来は軽く笑った。キリマが母のシャンプーでうつとりしていたのを思い出したのだ。

「キリマもお母さんのシャンプーが好きだったんだね。私はシャンプーが下手だし、これからはキリマもお母さんにしてもらおう？」

決して雑にしているつもりはないのだが、不器用な美来はいつもシャンプーに苦戦していた。それなら母にやってもらったほうがキリマも嬉しいだろう。美来がそう思っていると、キリマは慌てて振り返り、尻尾を立てて前足で美来の膝をフミフミと踏んだ。

「いや。俺は、美来がいい。お母さんのシャンプーは確かに体中から力が抜け落ちるほど気持ちいいけど、俺は美来がいいんだ！」

何故かむきになったみたいと言うので、美来は「う、うん」と戸惑いつつ頷く。

その時、すっかりくつろぎの体勢で伏せていたウバが、ぱたぱたと尻尾を振りつつ、

美来に問いかけた。

「それにしても美来とお母さんは、一体なんの話をしていたのじゃ？ わらわについて話し合っていた様子だが、猫かふえとはなんだ？」

美来はハツと思い出し、ボンと拳を手のひらに当てた。

「そうそう。その相談をしようと思っていたんだよ。猫カフェっていうのは、お客さんに猫を見てもらって、癒いされながらカフェを楽しんでもらうお店のことだよ」

「ふむ。つまり、わらわがこの家に棲いむには、猫かふえでわらわみずが自ら、人間の客に奉仕せよということか？」

ムツとしたように、ウバが耳をピンと立てた。にわかには信じられないが、自分で『猫神』と言っている以上、彼女のプライドは高そうだ。そんなウバが人間に甘えたり、擦り寄ったりなど、できるとは思えない。

美来はおずおずとウバの顔色を窺うかがう。

「やっぱり嫌かな？」

「当たり前じゃ！ わらわがかつて社やしろにいた頃は、人間がわらわに供物くもつを差し出し、ひれ伏しておったのだぞ。そんなわらわに労働を強しいるというのか。わらわがこの家

に棲まうのが、どれほどありがたいか、わかつておるのかっ」

案の定、ウバは怒り出した。

やはりプライドが高いらしい。この様子では、ウバを無理矢理猫カフェに置いたとしても、客に迷惑をかける可能性があるだろう。考えれば考えるほど、ウバは客商売に向いていない。美来は額ひたいを押さえて「うーん」と悩む。

「でも、ウバを飼う条件が猫カフェだし……」

「それなら話は簡単だ。そいつを捨てたらいい」

突如、冷たく言い放ったのはキリマだった。美来は「えっ」と驚いた声を出す。ウバも、金色の目を丸くしてキリマを見つめた。

「俺はかつて、その猫神に退治されて自分の力を失ったんだ。神は鬼を討うつものだから当然の話だが、力を奪われた鬼が墮おちた場所は、地獄でしかなかった」

「キリマ……」

美来は、膝の上で力なく呟くキリマの背中を撫でる。キリマは決まりが悪そうに俯うついた。

「猫鬼は普通の猫に比べてはるかに寿命が長い。俺は死ぬこともできないまま、毎日

泥水をすすり、生ゴミを漁っていた。そんな俺を拾ってくれたのが、美来なんだ」

遠い目をするキリマを、ウバが黙って見つめる。

「俺にとつてこの家は、やっと見つけた安息の地だ。毎日おいしいごはんがもらえて、新鮮な水やミルクがもらえて、美来が傍にいる。俺はそれだけで幸せなんだ。だから神だなんだとかしずかれて、毎日馳走をたらふく食ってたやつなんかと一緒に棲むのはごめんだ」

フンツとキリマはそっぽを向いた。急激に場の空気が悪くなって、美来はあわあわと慌て出す。すると、ウバがノッシリと四本足で立ち上がった。

「そうさな。わらわとて人間に愛想を振りまいてまでここに棲みたいとは思わぬ。わらわに相応しいのは、もつとわらわを敬う従順な人間であろう」

「まったくその通りだ。あんたを神様だと崇め奉ってくれる優しい人間様を探せよ」

キリマのそつけない言葉にしかめ面を浮かべたウバは、まるで売り言葉に買い言葉のように「言われなくても探すとも」と吐き捨て、スタスタと出ていこうとした。

焦った美来はなにか目を引くものはないかと探して、ソファの脇に置きっぱなしになっていたチラシを一枚取り、くしゃくしゃに丸めてウバの傍に投げる。

「ニヤツ!？」

神や鬼と言えど本質は猫なのか、ウバとキリマは揃ってパツとチラシに顔を向け、床に転がるそれを捕まえようとした。

その瞬間、美来はオモチャ入れから猫じやらしをサツと二本取り出し、チャキンと構える。さながら宮本武蔵の二刀流である。得物は猫じやらしだが。

床を転がり、チラシを奪い合うウバとキリマの傍に走り、二本の猫じやらしを突き出した。

キラリと目を光らせたのはキリマ。初めて見るオモチャに驚くのはウバ。

「とうっ！ 私の猫じやらしを捕らえられるかな!？」

美来は猫じやらしを横に振る。小さな鈴のついたそれは可愛らしい音を立て、先端についた細長いリボンもウネウネと動いた。

先に反応したのはキリマだ。ハシツとリボンを取ろうとした彼に、美来はサツと猫じやらしを上げる。ウバは前足を伸ばして伏せの体勢になり、尻尾をせわしく左右に動かしした。

「ニヤー!」

ハンターの目になったウバが飛び上がる。美来は猫じゃらしを回してウバの前足を避け、次は床に猫じゃらしを置いた。そして蛇に似せてユラユラと動かす。

「ニャ」

「ニャー！」

臨戦態勢で尻尾を揺らすキリマに、猫じゃらしを観察しているのか、ウロウロと歩き回るウバ。

シャツとキリマが猫じゃらしに猫パンチを繰り返す出、ウバは前足で猫じゃらしを踏みつけようとする。

二匹の多段攻撃をさらりとかわした美来は、クルクルと猫じゃらしを回し、蝶々に見立ててリボン宙でゆらめかせた。

「ニャアアアー！」

ウバの巨体が跳ぶ。爪を立てた前足でかつさうようにリボンを捕ろうとするが、美来の猫じゃらしは優雅にかわす。ドスンと衝撃的な音をさせ、ウバは床に転がり、すぐに体勢を立て直して猫じゃらしを睨んだ。その金色の瞳は爛々と輝いている。

（ふはは、かかりおったな。君たちはすっかり猫じゃらしの虜よ！）

美来は勝者の笑みを浮かべた。陰悪な空気はどこへやら。今は二匹とも猫じゃらしに夢中だ。

その後たつぷり十五分、美来は猫じゃらしでウバとキリマを翻弄した。

先に体力が尽きてフローリングに伏せたのはウバだ。ぺたんと四肢を投げ出し、背中をせわしなく上下させて「はあ」と息をつく。

「……なんだこれは。わらわともあろう者が、つまらぬことで必死になってしまった」
「美来の猫じゃらしは巧みすぎるんだよ。止めようと思っても、目が、足が、勝手に動いてしまう」

伏せてこそいないが、キリマも疲れたようにぐったりしていた。十分に猫じゃらしで遊んだ美来は「ふふふ」と笑ってオモチャを片付け、キリマの頭を撫でる。

「たくさん遊んで少しは落ち着いた？ ウバはもう、うちの子なんだから、キリマは意地悪なこと言っちゃだめだよ」

「……だ、だつてさ」

「だつてはなし！ キリマとウバに因縁があるのは理解したよ。でも、だからといってウバを追い出しているはずはないと思う。だって、今のウバは、ひとりぼっちなん

でしょ？」

美来の言葉に、フロアリングで伸びていたウバがピクツと耳を揺らす。キリマはなんとも言えない様子で美来を見上げた。

「神社で見つけたウバは、毛並みは荒れ放題だったし、目ヤニが溜まっていた。間違いないく放置されていた猫だったよ。昔は猫神として崇められていたのかもしれないけど、今は違うんだよね？」

その問いかけに、ウバはそっぽを向いて黙り込む。だが、美来の言葉を否定しないということとは、それが正解なのだろう。

ウバは四百年もの間、山に棲んでいた。それがいつから仲間もいなくなり、たった一匹になったのだ。

ウバにどんな心の転機があったのかはわからない。でも、ウバは人里に下りてきた。そして人間を見下しながらも、美来に拾われたのだ。

動物病院で大人しく処置されていた時の態度は、少なくとも美来を拒絶していなかった。ウバは拾われたと思ったのではないか。

美来はウバに近づくと膝をつき、優しく頭を撫でる。花代子が洗ったばかりの毛並

みはフカフカで、滑らかな手触りが心地いい。耳をくすぐれば、気持ちよさそうに「うなあ」と鳴いた。

「ウバを拾った時、運命だって感じたよ。だって、出会い方がキリマと全く同じだったからね。キリマもウバと一緒だったよ。毛並みはぐちゃぐちゃで、下水の臭いがして、酷くすさんだ目をしていた。……だから、助けたいって思ったの」

「美来、それは」

キリマがなにかを言いかけて、困ったように口をつぐむ。黒い尻尾をぺたんと床に伸ばして、三角形の耳を伏せた。しばらくすると思ひ直した風に顔を上げ、拗ねた様子で口を尖らせる。

「……それより美来、あんまりウバを撫でるな。俺も撫でろ」

催促するみたいに、前足でぼしぼしと美来の膝を叩く嫉妬深いキリマに笑いつつ、美来はウバに向かって優しく目を細めた。

「ウバ、うちに住みなよ。猫カフェって言っても、人間に愛想を振りまく必要はないんだよ。ただ、お店で過ごしてくれたりいいの。私がアルバイトしている猫カフェでも、猫たちは自由気ままにしているよ」

「だ、だが、ここに棲むとなれば、そのキリマが嫌な顔をするだろう?」
 ウバが横目でキリマを見る。するとキリマは「ニャー」と不満げに鳴いた。
 「そりゃ嫌に決まってるだろ。でも、美来がそこまで言うなら構わない。ここは美来
 のうちなんだからな」

「わらわがいても構わんと言うのか。かつてはおぬしの力を奪ったというのに」

「確かに、思い出すと腹が立つ。でも怒ったところで、奪われたものは返ってこない。
 おまえが美来の言うことをちゃんと聞いて大人しくするなら、俺はいいよ」

「……そうか」

そっけない態度で返事をするキリマに、ウバが神妙に頷く。美来が二匹のやりとり
 を黙って見ていると、ウバは前足と後ろ足を交互に伸ばして立ち上がった。

「承知した。それなら、ここに棲むのもやぶさかではない。猫かふえというものも、
 愛想を売らなくてよいのなら構わん」

「本当に? よかった!」

美来がばあつと満面の笑みになる。そんな彼女を驚いた目で見てから、ウバはコホ
 ンと咳払いをした。……猫が咳払いをするのを、美来は初めて見た。

「時に美来。その『猫かふえ』というものは、結局のところ、猫が人間に接客すると
 いうことなのか?」

「そうだね。お料理や飲み物を運ぶのは人間だけど、お客さんは猫を見にきているよ
 うなものだし、接客というのも間違っていないかな」

「つまり、猫が主役の店、ということか?」

「猫カフェっていうくらいだからね」

美来が頷くと、ウバが「ふうむ」と俯く。やがてなにかを決心したのか、大きな
 尻尾を膨らませて、パツと顔を上げた。

「美来、それならば、わらわがその猫かふえの主となろう」
あるじ

「はあ?」

「へ?」

美来とキリマの声が重なり、揃ってウバに注目する。

ウバは自分の名案に満足しているのか、こくこくと頷いた。

「そう。主じゃ。働く猫どもを管理し、時に指導する上役の猫が必要であろう。わら
 わが主となって、その『猫かふえ』とやらをおおいに盛り上げてくれようぞ」

「ちょっと待て！ 俺は嫌だぞ！ おまえの下につくなんて絶対反対だつ！ それに猫カフェの主人は美来が……いや、美来のお父さんがなるはずだろ！」

尻尾を立てたキリマが前かがみになって怒り出す。しかしウバは聞く耳を持たない様子でペロペロと前足を舐めた。そしてチラリと美来を見る。

「美来の『お父さん』……。つまり『お母さん』のツガイということか。そのツガイは、猫かふえでどんな役割を担^{にま}うのだ？」

「え？ うーん。コーヒーや紅茶を淹^いれたり、軽食を作ったりする役割かなあ」

もつと言えば、父親は喫茶店の経営者なのだから、キリマの言葉が正しい。だが、ウバは美来の説明を聞いてフツと鼻であざ笑う。

「なんだ。ツガイは単なる飯炊き役ではないか」

「め、めしたき……つて」

源郎が聞いたら怒り出しそうだ。源郎の名誉のためにも、ウバの認識を改めさせたところである。

「わらわが猫カフェの主となる。そのキリマは従業員、美来はわらわたちの世話役兼給仕、そして飯炊きの『お父さん』。うむ、完璧な布陣であるな」

「待て！ 勝手に俺を従業員にするな！」

「ところで美来、お母さんはなにをするのだ？」

ニヤーツと怒り出すキリマには目もくれず、ウバが尋ねてくる。はいしどうどうと、キリマの背中を撫でてなだめながら、美来は答えた。

「お母さんはフロアスタッフだよ。あとは、車で出前に行ったりしてるかな」

「ふむ。お母さんはわらわに至上のシャンプーをしてくれる崇高な存在だ。あまり負担をかけたくないので、美来は給仕に一層^{はげ}励むがよいぞ」

「なんでお前がさっそく仕切ってんだよ！」

ニヤンニヤンと手足をばたつかせてわめくキリマを抱き上げ、「しょうがないなあ」と美来はため息をついた。

「ウバを飼うための条件が猫カフェだからね。仕方ない、ウバを猫カフェの店主として迎えたいでしょう。ただし、あくまで裏の話だからね？ 表の経営者はお父さんなんだから、店ではちゃんとお父さんの言うことを聞くように」

「そこはわきまえておるぞ。元々、わらわたちの存在は人間世界の裏側にある。影の支配者、縁の下の力持ちというやつであるからな！」

ウバが二本足で立って仁王立ちになり、えっへんと胸を張った。ウバは基本的に傲岸不遜な態度だが、人間の前で声高に己の正体を明かすつもりはないようだ。

それなら別に、猫カフェの店主を名乗ろうが構わないだろう。キリマは不満そうだが、ウバ自身が満足しているの、申し訳ないけれど我慢してもらうしかない。

「さて、うちが猫カフェになるなら、今のアルバイトは辞めなきゃいけないね。お店のメニューもリニューアルしたいし、お父さんやお母さんとも話し合わないといけないし、仕事もいっぱい増えそうだよ」

「まったく。俺は今までの暮らしで十分満足してたのに、なんでこんなことになってしまったんだ」

美来の腕の中で、キリマがぐくりと首を垂れる。

「キリマは災難だったね。でも私、正直言くとワクワクしているんだ。あの古くて流行らない喫茶店がどんな風に変わるんだろうっていう楽しみもあるし、大好きなキリマと一緒に働けるなんて、想像するだけでも嬉しいからね」

「み、美来……」

「だから、一緒に頑張ろうよ、キリマ」

美来はピンク色をしたキリマの小さな鼻に、自分の鼻をツンと当てる。たちまちキリマはひげを震わせ、長い尻尾をだらしなく下に伸ばした。

「しょっ、しょうがないな。み、美来がそう言うなら、俺も頑張るしかねえな」

「ありがと、キリマ！」

ぎゅっと抱きしめて頬ずりする美来に、キリマはでれでれと脱力している。

「わかりやすいヤツよのう」

ウバは嘆息まじりに、呆れた口調で呟いた。